

## 隠れて生きる

### ——社交の害——

テレビやインターネットのなかった古き良き時代でさえ、世間に出ることを嫌悪した哲学者やモラリストは数多い。

ましてマスメディアが過剰に発達した現代では、世間に出ることの弊害は甚だしい。

マスメディアに露出すれば、何処に行っても人の視線にさらされ続ける。いわれのない批判や中傷はいうに及ばず、時にはストーカー的な嫌がらせさえ受ける。これらは決して例外ではなく、世間に出ることの必然的な代償である。だから、かつてのモラリスト達の多くは、「隠れて生きる」を理想としたのだった。

社交の害については、多くのモラリストが警告している。

最も人通りの多い道ほど最も人を迷わせるものである。気まぐれな人気の支配する人の集まりから離れるだけで、人は健康になる。（セネカ）

何事についてもそうだが、社交についても節度を守らなければならない。絶え間なく人と交際していれば、誰も精神的害を受けずにはすまない。

キリストでさえ、時には人との交わりを避けて神に祈らなければならなかった。いつも大勢の人に取り巻かれている神父たちの場合も、やがて彼らの精神力は衰えてしまう。（ヒルティ）

わたしが弁護士になりたての頃は、今とは違って、弁護士の広告に対する規制が極めて厳しかった。新しい顧客といえば、親戚とか、学友とか、先輩とか同業者の紹介によるものがほとんどであった。

だから、一本立ちするためには、どうしても人脈を広げる必要がある。まめに同窓会や異業種交流会や知人のパーティーに顔を出し、顔を売ることが必須であった。

交際が広ければ広いほど弁護士の勲章のような幻覚に捕らわれ、わたしも 30 代の中頃までは、せっせと社交に励んだものだった。

だが、パーティーで行きずりの人と話しても、2 次会で飲み明かしても、ただ精神的、肉体的な疲労が増すばかり。名刺の数は増えるものの、気の進まない人との付き合いが広がるだけである。こうしてわずかばかりのビジネス・チャンスを得るために膨大な時間を費やし、わたしはみずからを充電する時間を失ってしまった。

ラ・ロシュフーコオのいう様に「世にいう友情などは一種の利害関係にすぎない。利害関係をオブラートに包み取引をするだけのことである」

### ——パスカル：「考える葦」への軌跡——

パスカルも一時社交に惑わされたが、30代始めにはほとんど社交を絶ってしまった。

パスカルは当時の新興貴族であった「法服貴族」の家に生まれ、言葉を話すようになるとすぐ非凡な才能を示し始めた。しかもその神童ぶりは年と共にめざましくなり衰えることがなかった。息子の才能に驚いた父親は、パスカルを学校へやらずにみずから師となって近代的教育を施した。

パスカルは12歳の時に、「三角形の内角の和は2直角である」という「ユークリッド第1巻の第32命題」を直感的に見抜き、その証明法を探究した。また、16歳の時には『円錐曲線論』を発表して「アルキメデス以来」と賞賛され、当時の数学界の第一線に立った。

その後計算機を発明し、真空実験を行い、数学者、物理学者として「天才パスカル」の名は赫々たるものがあつた。

彼は28歳から31歳までの約3年間、社交界に出入りするようになる。いわゆる「パスカルの世俗時代」である。

著名な公爵夫人のサロンで講演や実験を行う一方、幼友達だったロアネーズ侯爵とも親交を結び、彼は社交界でたちまち名声を博した。

「世俗時代」のパスカルは、社交界の華やかさに一時は目を眩まされたようである。しかし、次第に彼はその愚かさに気が付いていく。社交界に出入りしてみると、享樂のうちに日々は過ぎ行き、物事を静かに味わうことができなくなる。自分の愛している全ての物がやがては滅びてしまう日が確実に到来するにも関わらず、人々は日々の享樂に時を過ごしている。パスカルはこの様な虚榮の集まりに耐えられなくなる。こうして、社交界に僅か3年で見切りをつけ、彼は31歳の時ポール・ロワイヤルに隠退する。

ポール・ロワイヤルはパリの西南30キロにある田園で、尼僧の修道院があり、社会的地位をなげうって隠遁した人々も多く住んでいた。この地で彼は魂の救われるのを感じ、急速に信仰への道を歩んで行く。そして後に『パンセ』（フランス語で「思想」の意味）として知られる著作にとりかかった。

パンセの中で、最も有名な「考える葦」の一節は、隠遁生活の思索の中でしか生まれなかったであろう。

人間はひと茎の葦にすぎない。自然のなかでもっとも弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するにはおよばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとえ宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙はなにも知らない。

だから、われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある。（前田陽一訳）

### ——デカルト：隠れて生きる——

デカルトは「よく隠れたる者はよく生きたり」（bene vixit, bene qui latuit）を生活の信条としていた。

ヨーロッパ各地を放浪し、29歳の時にパリに帰ったデカルトは、パスカル、哲学者のホッブス、小説家のバルザックなど一流の知性が集うサロン（後のフランス科学アカデミー）に出入りした。

しかし、デカルトは一流の知識人との交際にも心を魅かれなかったらしい。社交に淫して、貴重な自由時間を失うことを彼は恐れた。彼とて名声を望まない訳ではなかったが、それ以上に名声を恐れた。名声は人の自由と休息を奪うからであった。

彼は煩わしいパリの雰囲気嫌って、早くも32歳の時にオランダに隠遁し、53歳までの21年間をそこで過ごした。

この間デカルトは『方法序説』や『省察』の著作に勤しんだ。パリを離れて、彼はオランダで完全な自由と休息を得たのだった。

彼は友人への手紙の中で次のように述べている。

わたしは静かにしていることを激しいまでに望み、それをかき乱す者は全てその影さえ避けようとする人間です。（ホイヘンス宛手紙）

誰かがわたしに好意を寄せてくれるのがいっこうに嬉しくない、などと思うほどわたしは世間嫌いではありません。だが、わたしは好意を寄せてくれる人よりもわたしに全然かまってくれない人の方がはるかに好ましいのです。

わたしは名声を望みますが、それ以上に名声を恐れます。名声は人の自由と休息を奪うからです。わたしは自由と休息をこのオランダで完全に得ています。どれほど金持ちの王様でも、わたしの自由と休息を買いとることはできません。（メルセンヌ宛手紙）

### ——モラリストは孤独を好む——

莫大な財産を父親から相続したモンテーニュは、より安楽に悠々と生きるため38歳の若さで引退した。彼は書斎の壁にその時の決意をラテン語でこう記した。

わたしは久しく奴隸のような宮仕えと公職の重荷に疲れ果て、乙女のような学芸の胸に休らうべく決心した。運命が許してくれるならばわたしはこの静かな隠れ家で人生の沈みゆく晩年を全うするであろう。

モンテーニュは、真の自由を楽しむために、城に閉じこもって孤独の内に過ごそうとした。尤も志とは異なり、彼は世間から完全に引退はしなかった。王室侍従官に任命されたり、はてはボルドー市長を勤めたりした。「生まれつき社交に向いている」とみずから語ったモンテーニュは、厭世家でも世捨人でもなかった。しかしモンテーニュにとって、30代での「引退」は自分を取り戻すためのやむを得ない手段だった。

われわれは民衆から離れるだけでは十分ではない。場所を変えるだけでは十分ではない。自分自身の中にある諸々の卑俗な条件から離れなければならない。われわれ自身を隔離し、自己を取り戻さなければならない。

辛口のペシミストのショーペンハウアーも、社交を忌み嫌った。「精神力豊かな人は孤独であっても空想の世界で大いに楽しむことができる。だが精神の貧しい者ほど孤独を嫌う」というのが、彼の信念だった。

愚鈍な人は社交だ、観劇だ、旅行だ、娯楽だとなつぎつぎと変化を求める。精神が貧しく下品になるにしたがって、人は一層社交的になる。

精神の優れた人にとっては自分の思想に専念することができるから、孤独はむしろ歓迎すべきである。自分に自足して生きる「賢者の孤独」こそ幸福の極地と彼は考えた。ショーペンハウアーの言葉には多少の棘があるが、その裏側には人々の愚かさ、この世の定めなさ、そして人生への幻滅がある。

### ——ソローの『森の生活』——

アメリカの作家ソローも孤独を好んだ。

ヘンリー・デーヴッド・ソロー（1817年－1862年）は、生前はほとんど無名であった。ハーバード大学を卒業してパブリックスクールの教職に就いたが、わずか2週間で辞めてしまい、家庭教師、庭師、ペンキ屋、大工、石工、測量士などさまざまな職業に就いた。その傍らでせっせと原稿を書き、詩や随筆を発表したがほとんど認められなかった。唯一『森の生活』（『ウォルデン』）は多少売れたが、それで名声が高まったという訳ではない。死後半世紀もたって『森の生活』が評価されるようになったのは、大恐慌を経てアメリカ人がその生活様式を見直すようになった時である。

ソローは森の中の池の畔に小屋を建て2年3ヶ月一人で生活した。彼は孤独を愛する人間であったが、人間嫌いではなかった。森の中にあつて自然を楽しみ、孤独を楽しみ、人恋し

くなった時には町に出かけるのが彼の理想の生活であった。

わたしは大部分の時間を一人で過ごすのが健全であるのを知っている。最良の人でも一緒にいると退屈し、気もそぞろになる。わたしには孤独ほど上手くつきあえる仲間はいない。物を考える人間、働いている人間は何処にいようと孤独である。孤独は人間と人間を隔てる空間の距離によっては計ることはできない。

ソローにとっては幸福な森の生活であったが、町の人々にとっては彼は厄介者で怠け者で人生の落伍者だった。だが、ソローは逆にこんな風に世間を見ていた。

どうしてわれわれはこうもせわしくなく人生を無駄遣いして生きなければならないのか。仕事仕事と大騒ぎするが、われわれは大事な仕事など何一つしていない。もしわたしが教会の鐘を鳴らして火事を知らせれば、仕事が忙しいといていた男も飛んでくるし、女子供も何もかも投げ捨ててやってくる。だが、それも火の中から家財道具を運び出すためではなく、ただ燃えさかる家を見たいがためである。

ソローが小屋を建てた場所は、彼に好意的であった哲学者のエマソンの所有地であった。間口3メートル、奥行き4.5メートルの小屋で煉瓦造りの暖炉があった。ここで彼はじゃがいも、とうもろこし、えんどうなど自分が食べる物だけをつくり、自給自足の生活をした。

そして本を読み、原稿を書き、森を散歩し、畑を耕して日々を送った。ソローは毎日4時間も散歩する自由があった。わずか2.5キロほど先のコンコードの町に時折出かけては、日雇い仕事をした。

見渡す限りの森の風景はわたし一人のものだ。わたしは自分の日と月と星を持つ。わたしだけの小さな世界を持つ。夜はわたしが地球最後の人間でもあるかのよう  
に、一人の旅人もわたしの家のそばを通らず、家の戸をたたかなかった。

森に住んで寂しくありませんか、雨や雪の日の夜は皆のいる所へ行きたくなりませんか。しばしばわたしはこう聞かれる。わたしはこう答えたくなる。この地球は宇宙の1点にすぎない。遥か彼方の星では一番遠くに住む者同志がどれくらい離れていると思いますか。人間を仲間から隔てて孤独にさせるのは果たして空間でしょうか。

ソローが実感したのは人間存在の孤独だった。いくら他人と交わろうと、人間は孤独である。われわれの孤独は、社交によって決して癒されるものではない。